



### クウェート国民議会選挙

(一財) 日本エネルギー経済研究所  
中東研究センター

研究理事 保坂修司

はじめに

2013年7月27日、クウェートで第14期国民議会の選挙が実施された。総有権者数は43万9,715人で、300人以上の立候補者（内女性候補8人）が5つの選挙区で50議席を争った。日中の外気温は摂氏45度を超え、しかも、クウェート憲政史上はじめてラマダーン月中に行われた選挙であったが、投票率は52.43%に達した（第1選挙区は58.14%、以下、58.8%、51.25%、50.93%、48.38%と定住地区のほうが部族地域より概して投票率は高かった）。反政府勢力のほとんどがボイコットした前回の選挙では投票率は40%だったので、それよりはだいぶ高かったが、クウェートにおける通常の国民議会選挙では投票率は60%を超えているので、それと比較すれば、低調といわざるをえないだろう。

クウェートの議会は、中東でも有数の、自由で強力な議会として知られている。他の中東諸国では行政府の力が圧倒的で、議会が形式的なものにすぎなかったり、湾岸諸国の多くのようにそもそも立法府としての議会が存在すらしないというありさまであった。

けれども、2010年末からのいわゆる「アラブの春」でだいぶ様相が変わってきた。クウェート並み、あるいはクウェート以上に自由な議会も登場するようになり、アラブ諸国の民主主義の雄としてのクウェートの立場もかなり色あせてきたのである。折からエジプトやシリアの混乱もあり、クウェート以外のメディアの関心もそれほど高いものとはいえなかった。だがしかし、関心が薄かった最大の理由は、この選挙が2006年以来、実に6回目の選挙であり、アラブのメディアにもそしてクウェート国民にも、選挙疲れが見られたことであろう。国民議会選挙が行われるのは今年2月以来であり、昨年12月から数えると3回目となるのである。過去7年半のあいだに6回の選挙というのはいかにも多すぎる。しかも、この間、任期を全うした議会はひとつもなく、すべて首長によって任期途中で解散させられたか、あるいは裁判所によって無効判決を受けて解散させられたか、なのである。今回の選挙に関していうと、今年6月16日、憲法裁判所が、昨年12月に成立した国民議会に対し違憲判決を下したため、同議会が無効になったのを受けて行われた。

## 選挙までの経緯

クウェートで議会と政府が対立するのはめずらしいことではない。独立し、国民議会が成立して以降、議会はつねに政府と対立してきた。クウェートの議会は、中東では稀な牙をもった議会なのである。しかし、現在の混乱は、明らかに伝統的な「対立」の枠組だけでは説明できないものであった。

2006年にジャービル前首長が逝去し、ごくごく短期間のサード首長の治世をはさんで、ジャービル首長の異母弟、サバーフが首長位を継いだ。新首長は甥（兄の息子）で、サバーフ家の若い世代のリーダー格と目されていたナーセル・ムハンマドを首相に任命、組閣を命じた。しかし、新しい政府が、選挙制度改革などをめぐって第10期国民議会と対立、事態が紛糾したため、サバーフ首長は5月に議会を解散した。6月に国民議会選挙が行われたが、これによって事態が好転したわけではない。

この第11期議会は任期を全うできなかった。議会内では宗派对立が拡大、さらに経済や汚職問題などで内閣と議会がことあるごとに衝突したため、2008年、内閣は総辞職してしまう。これを受けて、首長はふたたび議会を解散する。

このあとの選挙で選ばれた第12期国民議会もわずか1年で解散の憂き目にあう。政府と議会の対立はいっこうに終息せず、イラン人シーア派の入国問題をめぐってナーセル・ムハンマド首相の吊しあげ要求が議会から出され、再度内閣は総辞職する。その後も議会の喚問要求、内閣総辞職、首長が同じ人物を首班指名し、ふたたび対立が激化、ふりだしに戻るといったパターンがつついた（この間、ナーセル・ムハンマドは3回にわたって議会で非協力動議（不信任案に相当）をつきつけられたが、いずれも否決されている）。やがて、10人以上の議員を巻き込んだ汚職事件が明らかになり、政府はますます窮地に追い込まれ、2011年末、ナーセル・ムハンマド首相は辞任した。2011年にはいわゆる「アラブの春」の影響がクウェートにもおよんでおり、クウェート各地でさまざまな階層の人たちが改革を求めるデモを行うようになった。同年末には国民議会議員を含む暴徒が議会を占拠するという事件も発生、こうした事件が事態をいっそう複雑化させていった。

その後、サバーフ首長は、ナーセル・ムハンマドをあきらめ、サバーフ家としては傍流のジャービル・ムバラク国防相（当時）を首相に任命し、状況を一新するため議会を解散、2012年2月にまたまた国民議会の選挙が行われた。新首相と新議会のもと、事態が打開されるという期待もほとんどないまま、案の定、両者の関係は泥沼化し、ついには業を煮やしたサバーフ首長が6月に議会の休会を命じたのである。しばらく頭を冷やせといったところであろう。

ところがその直後、憲法裁判所が、2月の選挙には手続き上の不備があるからとして、現行議会は無効であるとし、国民議会の解散と2009年議会の復活を命じたのである。これまであまり注目されていなかったが、実はクウェートでは司法も強大な権力をもっていたわけだ。

だが、復活した議員たちの大半が復活議会をボイコットしたため、2009年議会は召集することすらできなかった。そのため、クウェートではしばらくのあいだ立法府が機能停止状態に陥ってしまったのである。

こうした状況を憂慮し、内閣は議  
会を解散すべきであるとの勧告をサ  
バーフ首長に提出、同首長はそれを  
受け入れ、2012年10月、2009年国民  
議会の解散を命令した。このとき首  
長は、議会解散中というタイミング  
を使って、選挙法を改正する勅令を  
発布する。それまでの選挙法では、有権者は1人4票を投ずることができたのだが、1  
人1票に変更したのである。しかし、これがまた両者の対立に拍車をかける結果となっ  
てしまった。反政府勢力は、この措置を選挙法の改悪ととらえ、ますます反発、大規模  
な反政府集会やデモが繰り返されたのである。

とりわけ、反政府ポピュリスト勢力「人民行動ブロック」のムサッラム・バッラーク  
は政府批判の急先鋒であった。彼のグループはアラビア語では Kutla al-'Amal al-Sha'bi  
と呼ばれ、英語では Popular Action Block と訳されている。その名のとおりに、いい意味  
でも悪い意味でもポピュリストであった。議会で政府を激しく糾弾、不信任決議案を連  
発するなどして何人もの閣僚を辞任に追い込んでいた。2011年末の国民議会占拠事件  
にも参加したほか、極めつけが、2012年10月の集会での発言であった。このとき、バッ  
ラークは「陛下（サバーフ首長）、われわれはあなたがクウェートを独裁の闇に引きずり  
こむのを絶対に許さない Lan nasmah lak」と述べたのである。クウェート憲法では、首  
長に対する批判は許されず、のちに彼はこの発言のために逮捕されることになる（その  
後保釈）。しかし、彼のことは「われわれはあなたを許さない」は政界に大きなインパク  
トを与え、以後、彼の支持者たちのスローガンとして頻繁に用いられるようになった。

2012年12月に実施された選挙は、結果的に反政府勢力の大半が選挙をボイコットした  
ため、投票率が40%を切るという、クウェート憲政史上最低の数字を記録してしまった。  
また、シーア派議員が17人当選するというのも従来の記録を大幅に上回る記録であった。

この議会は親政府派が多数を占めたはずであったが、かならずしも政府と議会の関係

#### 筆者紹介

慶應義塾大学大学院修士課程修了。在クウェート日本  
大使館・在サウジアラビア日本大使館専門調査員、中東  
調査会研究員、近畿大学教授等を経て現職。主な著書に  
『乞食とイスラーム』（筑摩書房）、『サウジアラビア』（岩  
波新書）、『オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦』（朝日  
新聞出版社）、『イラク戦争と激動する中東世界』（山川  
出版社）等。

表1 国民議会の最近の動向

| 会期 | 任期                                | 備考                                  |
|----|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 10 | 2003/7～2006/5                     | 選挙区改正をめぐって紛糾                        |
| 11 | 2006/6～2008/3                     | 宗派対立、汚職問題で紛糾                        |
| 12 | 2008/5～2009/3                     | 宗派対立、汚職問題で紛糾                        |
| 13 | 2009/5～2011/12,<br>2012/7～2012/10 | ナーセル・ムハンマド首相辞任<br>復活した議員たちは議会をボイコット |
| -  | 2012/2～2012/6                     | 解散手続き上の問題で違憲判決、2009年議会の復活を命令        |
| -  | 2012/12～2013/6                    | 選挙手続き上の問題で違憲判決、選挙実施を命令              |
| 14 | 2013/7～                           |                                     |

が順調に進んでいたわけではない。反政府勢力が猛反発していた選挙制度改正は新議会によって承認されたが、その時点でもこの議会が任期を全うできるとはほとんど誰も考えていなかった。2013年5月には、米ダウ・ケミカル社への賠償金支払いをめぐる議案が政府を厳しく追及、ハーニー・フセイン石油相が辞任に追い込まれた。

そして、2013年6月には日本の最高裁判所に相当する憲法裁判所が、12月に成立した国民議会は手続き上の問題で不備があったとして無効とする判断を下すとともに、新たな選挙の実施を命令した。国民議会の選挙が2回つづけて無効になったのである。これもまた前代未聞の事件であった。

### 選挙結果の分析

選挙結果は選挙の翌7月28日には明らかになった。筆者試算によれば、前回選挙で17議席を獲得していたシーア派が大幅に議席を減らし、8議席になった。一部報道によれば、リベラル派は少なくとも4議席は獲得したもよう。また、新人は17人で、女性は2人（前は3人）だけであった。なお、反政府勢力のなかのイスラーム主義勢力の一部（主としてムスリム同胞団系）、ポピュリスト勢力が選挙をボイコットしたため、結果的に親政府勢力がそれなりの議席を得たようにみえる。ただし、クウェートでは政党がないため、各立候補者・当選者の政治傾向を分析するのはむずかしい。リストに挙げた政治傾向は基本的に筆者の私的な分析によるもので、かならずしも正確なわけではない。

一般にメディアは今回の選挙の勝者としてリベラル派や部族を、一方、敗者に関しては一気に議席を半減させたシーア派を挙げることが多い。たしかにシーア派は今回、前回と比較して大きく後退したが、これまでの選挙におけるシーア派の議席はだいたい5から10であり、前回の17議席が異常だったと考えれば、敗北とはいいがたい。また、報道によれば、部族は24議席を獲得した。前回の選挙は、有力部族の多くが選挙をボイコット、とくに全有権者の2割近くを占めるアワジムとムタイルという二大有力部族がクウェート憲政史上はじめて議席を失ったことが話題になったが、今回の選挙では両部族ともしっかりと議席を確保した。

スンナ派イスラーム勢力は、ムスリム同胞団がボイコットしたもの、サラフィー主義およびイスラーム主義に近い候補者で、少なくとも8人が当選したという票読みも有力である。

また、50議席中ほぼ半数を、無効判決を受けた2012年12月の議会メンバーが占めた。50%を超えた投票率と含め、これをどうとらえるか。

### 新内閣

なお、内閣は選挙結果を受けて、総辞職した。また内閣は臨時閣議を開催、当選者に対し祝意を表明するとともに、行政府と立法府が問題解決のために協力していくことを希望すると述べた。さらに内閣は新議会開催を8月6日とすると発表した。

サバーフ首長は7月29日、内閣総辞職を受け、予想どおり、再度ジャービル・ムバーラクを首相に指名、組閣を命じた。そして、8月4日、サバーフ首長は、ジャービル・

ムバーラク首相率いる新内閣（第33代）を発表する勅令（2013年第209号）を發布した。新内閣は同日、サバーフ首長のまえで忠誠を誓った。新内閣の顔ぶれは下記のとおりである。

- ジャービル・ムバーラク首相  
Sheikh Jaber Al-Mubarak Al-Hamad Al-Sabah（1942年生）（サ）
- サバーフ・ハーリド副首相兼外相  
Sheikh Sabah Khalid Al-Hamad Al-Sabah（1953年生）（サ）
- ムハンマド・ハーリド副首相兼内相  
Sheikh Mohammad Khalid Al-Hamad Al-Sabah（サ・新）
- ムスタファー・ジャーシム・シマーリー副首相兼石油相  
Mustafa Jasem Al-Shimali（1943年生）（シ・横）
- サーレム・アブドゥルアジーズ副首相兼財政相  
Sheikh Salem Abdulaziz Al-Saud Al-Sabah（サ・新）
- ハーリド・ジャッラーフ副首相兼国防相  
Sheikh Khalid Al-Jarrah Al-Sabah（1972年生）（サ・新）
- アナス・ハーリド・サーレフ商工相 Anas Khalid Al-Saleh
- ジクラアーイーェド・ラシーディー社会問題労働相  
Thikra Ayed Al-Rashidi（1970年生）（女）
- ローラー・アブダッラー・ダシュティー国民議会担当国務相兼計画開発担当国務相 Rola Abdullah Dashti（1964年生）（シ・女）
- サーレム・ムジブ・ウザイナ住宅問題担当相兼自治担当相  
Salem Mutheeb Al-Utheina（横）
- サルマーン・サバーフ・サーレム情報相兼青年問題担当相  
Sheikh Salman Sabah Salem Al-Humoud Al-Sabah（サ）
- シャリーダ・アブダッラー・マウーシェルジー司法相兼ワクフ・イスラーム問題相 Shareeda Abdullah Al-Muoshherji（1952年生）
- アブドゥルアジーズ・アブドゥッラティーフ・イブラーヒーム公共事業相兼電気水相 Abdulaziz Abdulatif Al-Ibrahim（1952年生）
- イーサー・アフマド・カンダリー通信相  
Essa Ahmed Al-Kandari（1952年生）（議・新）
- ムハンマド・アブダッラー・ムバーラク内閣担当相  
Sheikh Mohammad Abdullah Al-Mubarak Al-Sabah（1971年生）（サ・横）
- ナーイフ・ファラーフ・ハジュラフ教育相兼高等教育相 Nayef Falah Al-Hajraf

ローマ字転写は Kuna による

サ=サバーフ家，女=女性閣僚，議=議員，新=新人，横=横滑り

新内閣では新顔が4人、サバーフ家から7人（前内閣では6人）、女性は2人であった。注目の石油相はムスタファー・ジャーシム・シマーリーが財政相兼石油相代行から横滑りした。シマーリー石油相は1943年生まれ、エジプトのインシャムス大学卒業後、財政相勤務、2007年から財政相などを歴任した。財政相時代はクウェート投資庁（KIA）の総裁もつとめていた。石油相はもともとシア派テクノクラートが任命されることが多かったし、それまで石油相代行を務めていたので、シア派のシマーリーの任命はとくに驚くべきことではない。ただ、彼はこれまでも議会で何度も槍玉にあげられており、やめる、やめない、やめた、戻ったですったもんだしていたので、今後も議会との対立の焦点となる可能性がある。

女性閣僚は2人とも元議員である。ジクラー・ラシーディーは2012年12月の選挙において第4選挙区で当選した。第4選挙区のような部族選挙区で女性が当選するのはサブライズとってよかろう。ジクラーは名前からわかるとおり、ラシャーイダ族であり、第4選挙区はまさにラシャーイダ族の地盤である。だから有利だったことはあろうが、やはり女性の社会進出をよしとしない気風の強い場所で並みいる男性候補を押しよけての当選は、部族選挙区でも何がしかの変化が現れてきた証拠といえるかもしれない。

一方、ローラー・ダシュティーは2009年選挙において第3選挙区で当選している。彼女はシア派であるが、第3選挙区という、かならずしもシア派が有利とはいえない選挙区である。そこで立候補し、当選したということは、彼女の支持層が、シア派だけでなく、リベラル層にもあることを意味しているのかもしれない（ちなみにジクラー・ラシーディーは緩やかにヒジャーブを巻いているが、ローラー・ダシュティーは基本的に髪の毛を出したままである）。

## 議会召集

8月6日、第14期国民議会が召集された。新しく選ばれた議員たちはサバーフ首長のまえで宣誓を行い、さらに正副議長を選出した。議長には第2選挙区でトップ当選を果たしたリベラル派で、名門ガーニム家出身のマルズーク・ガーニムが、副議長には第4選挙区選出のラシャーイダ族、ムバーラク・フレイニジュが選ばれた。

また、初日には各委員会および小委員会のメンバーも決まった。日本の国会と同様、クウェートでも議案・法案は最初に委員会レベルで審議されるので、ここにどの議員がつくかで、議論の大方の方向性が決まってくる。その意味でひじょうに重要なポストといえるだろう。主な委員会には、陳情委員会、国防内務委員会、経済財政委員会、司法委員会、教育文化委員会、保健社会労働委員会、外交委員会、国家予算委員会、公金保護委員会などがある。

議会開会に際し、サバーフ首長は演説で、国益を損なうような対立を避け、協力していくよう呼びかけた。これに対し、ガーニム新議長からは、新議会が過去の対立を乗り越え、新しいページを開くと応じたが、果たしてうまくいくかどうか。議会は最初のセッションを終えると、閉会となった。立法府と行政府の協力がうまくいくかどうかは、10月末の議会再開まで待たなければならない。まずは仕切り直しというところであろう。

おわりに

もちろん、クウェートにおける議会と政府の対立がそう簡単に収まるはずはない。大きな問題のひとつは、政治的対立の火種が議会だけでなく、議会外に広がっていることである。人民行動ブロックを中心とする反政府勢力が選挙をボイコットしたことを忘れてはならない。彼らは今後も議会外で政治活動を展開するであろう。彼ら、たとえば、そのなかでも過激なムサルラム・バッラークらの政治綱領は、政党の結成や首相を首長家以外から選ぶことなど、すでにサバーフ家体制の根幹を揺るがすような内容をもちはじめており、それを体制の枠組のなかに引き戻すのは容易なことではない。首長は、首長批判で捕まった人たちに恩赦を出したが、それだけで彼らが静かになるとは思えない。

しかも、彼らの背後にはSNSなどで武装した若者たちが控えている。若者たちが、反政府勢力を含む既存の政治に倦んでいることはまちがいない。しかし、現状のクウェート政治に果たしてその不満や怒りを吸収できる力があるのかどうか。何らかのブレークスルーがなければ、制度疲労を起こして、いずれぼっきりと折れてしまうのではないかと、の危惧は根強い。

サバーフ首長は、一見するとその風貌から好々爺のようにもみえるが、けっしてそうではない。かつて、あるクウェートのジャーナリストは筆者に対し、首長は政治をみずからの思うとおりにコントロールしようとしており、だからこそ自分の意のままになる首相を選ぶのだと述べたことがある。みずからのイニシアティブを振りかざし、政府を引っ張っていくような強い首相は、サバーフ首長は望んでいない。そのあたりは、すでに政治家たちには見透かされているはずだ。議員たちが弱い首相を叩くのは、彼らが真に対峙すべき相手は首相ではなく、首長だということを理解しているからであろう。

考えてみれば、違憲とされた議会も親政府派が多数を占めたと分析されていたが、いざ蓋を開けてみれば、やはり議会と政府と真っ向対立する局面が多数現れた。今回の議会もそうならないという保証はまったくないのである。結果的に割を食うのは、さまざまな経済プロジェクトである。両権力の対立でいったいどれだけのプロジェクトが遅れ、お蔵入りになっていったのか。湾岸の民主主義先進国であるクウェートで、経済のためにはやっぱり開発独裁のほうがいいよね、などという声が聞こえるようになったのは、貧すれば鈍す以外の何ものでもないだろう。

とはいえ、クウェート型民主主義は、独裁的な湾岸諸国で民主主義を志向する人たちからみれば、いぜんとして有力なモデルではある。しかし、このまま混乱がつづくようでは、反面教師にしかならず、今後ともモデルでありつづけるためには、この議会で、新しいステップアップが必要であろう。

もう一点、これまでクウェート政治に関心をもつものたちは、政府と議会だけ見ておけばよかったのだが、ここ最近の事例から、第3の権力、司法の問題にまで目を向ける必要性が出てきた。選挙をフォローするだけでも大事なのに、このうえ司法までとは、クウェート人だけでなく、研究者にとっても因果なことである。